

## 4. 診断に苦慮した深在性Ki-1リンパ腫の2例

(内科学第一講座) 林 重文, 嶋本隆司, 安藤恵子, 内田淑子, 伊藤良和, 矢口 誠, 宮澤啓介, 木村之彦, 大屋敷一馬  
(病院病理部) 芹沢博美, 海老原善郎  
(病理学第一講座) 向井 清

【症例1】55歳、女性。胸腹水および腹腔内リンパ節腫脹認め、開腹生検施行するも診断に至らず。腹水細胞のDNA診断でIgJH再構成を認めたため、B細胞性リンパ腫を疑い、DICE療法施行。治療効果認めるも神経症状出現、髄液中にCD30陽性の多核大型細胞を認めた。放射線治療で一時改善したが、その後全身播種きたし死亡した。

【症例2】46歳、男性。発熱、表在および腹腔内リンパ節腫脹、肝内浸潤を認め、表在リンパ節および経皮的肝生検では診断に至らず、開腹下肝およびリンパ節生検でCD30陽性の大型リンパ腫細胞の増殖あり、Ki-1リンパ腫と診断。ABVD療法にて病変は著明に縮小し経過良好である。

【結語】Ki-1リンパ腫はCD30陽性の未分化な大型異型細胞のびまん性増殖を示す非Hodgkinリンパ腫で、節外浸潤も多く知られる。また、リンパ節病変の多様性から診断に苦慮することがあり、積極的な主病巣の生検および免疫染色や遺伝子解析も含めた総合的診断が重要である。

## 5. 全身性アミロイドーシスを合併した原発性マクログロブリン血症の一部検例

(八王子医療センター 老年科) 金高秀和, 藤井広子, 清水武志, 金谷潔史  
(八王子医療センター 病理部) 望月 眞

87歳、男性。舌腫瘤及びM蛋白血症精査目的で当科入院。原発性マクログロブリン血症と診断し、化学療法を施行したが著効は認めなかった。舌及び胃粘膜生検にてアミロイド沈着を認め、全身性アミロイドーシスと診断し、dimethyl sulfoxide (DMSO) の下肢塗布を行ったが、効果は得られなかった。発症4ヵ月後、全身状態低下に伴う肺炎のため死亡。剖検にて、全身組織にアミロイド沈着を認め、特に、舌断面・胃漿膜・胸膜表面に著明な沈着を認めた。過マンガン酸処理後のコンゴレッド染色舌組織にて、アミロイド蛋白はAL型と判明した。M蛋白血症には10%以下の頻度で全身性アミロイドーシスを合併するため、M蛋白血症では説明しにくい全身症状を呈す症例に遭遇した場合は、全身性アミロイドーシスの存在を念頭におく必要があると考えられた。

## 6. Fournier症候群を来した高齢者急性骨髄性白血病の一例 (老年病学教室) 後藤基温, 小山俊一, 清水武志, 菊川昌幸, 宇野雅宣, 米田陽一, 新 弘一, 高崎 優 (泌尿器科学教室) 金 泰正, 伊藤貴章, 三木 誠

症例は85歳、男性。平成11年1月下旬より発熱が出現し、肺炎の診断にて2月■近医入院となったが、汎血球減少を指摘され2月■当科入院となった。骨髓生検の結果、急性骨髄性白血病 (M1) の診断にて化学療法 (IDR+Ara-C) を施行した。治療15日目に突然、陰囊部の腫大が出現し、約半日のうちに手拳大から小児頭大にまで増大した。また、下腹部から大腿部にかけての境界鮮明な紅斑 (分界線) も進行した。Fournier症候群の診断にて、バルーン・カテーテル挿入にて尿路を確保のうえ陰囊切開し、局所デブリドメントを施行後ペンローズ・ドレーンを留置、十分に消毒・洗浄した。病理学的に切除組織は、陰囊の真皮・表皮ともに変性した壊死組織であり、bacterial colonyが散見された。切除組織の細菌培養検査では好気性培養ではMRSAが検出され、嫌気性培養では菌を検出できなかった。血液疾患治療期には陰部の清潔保持が必要であると考えられた。

## 7. 化学療法施行中、HCVウイルス活性化を伴う一過性肝機能障害を認めた非ホジキンリンパ腫の一例

(内科学第三講座) 小宮英明, 山本浩文, 石井幸司, 原田芳巳, 荒川 敬, 代田常道, 林 徹

【症例】69歳 男性

【主訴】左下顎腫瘤

【経過】平成10年11月、腫瘤自覚あり近医受診、精査加療目的にて当院紹介・入院。NHL (DLBL)、CS IVB、IPI : high risk。第10胸椎体部腫瘤による脊髄圧迫解除目的放射線療法後、T-COP療法開始。第2コース終了後、肝機能障害 (max GOT 630/GPT 484/T-Bil 5.28) を認め、HCV-RNA > 40Meq/mlであった。保存的加療により肝機能は正常化、HCV-RNA < 0.5となった。以後PSL中止、VP-16を加えsalvage chemotherapyを2コース施行したが、肝機能障害は認めず、退院、CRuを維持している。

【考案】化学療法によるHBキャリアーの劇症化と異なり、HCVによる肝機能障害の報告は稀である。その経過からPSLによる免疫抑制の関与が強く疑われた。